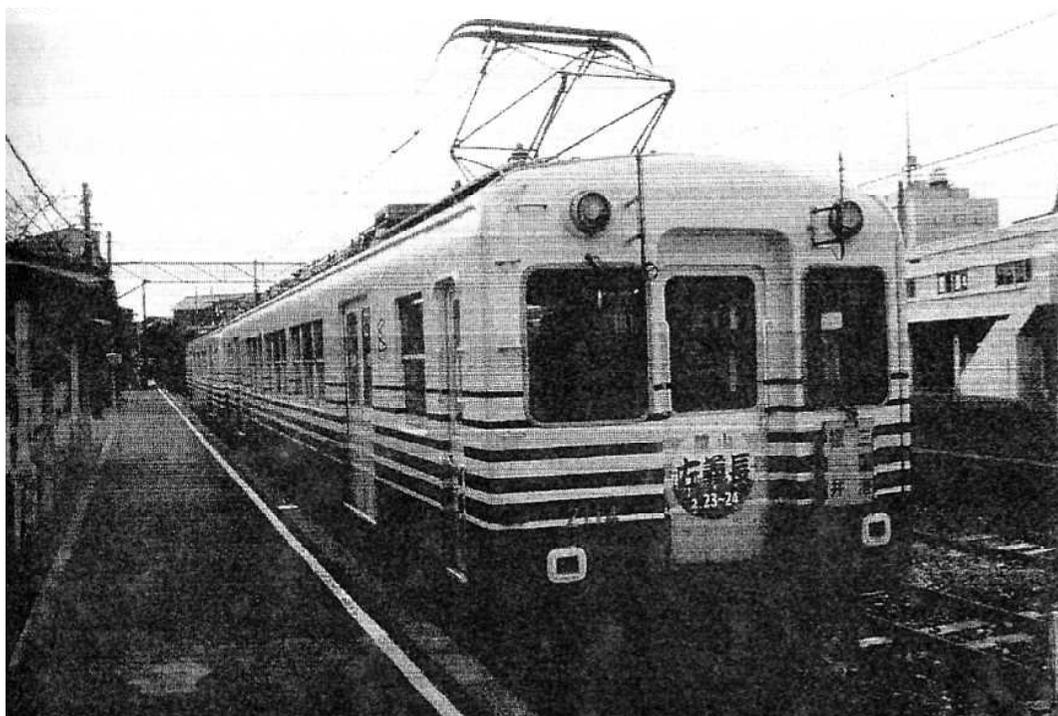


わ だ ち

No. 117

wa da chi

平成20年3月号



(2000年2月20日 えちぜん鉄道 三国港駅にて 撮影 森家治)

えちぜん鉄道 勝山「左義長まつり」ヘッドマーク取付！

えちぜん鉄道では、2月23、24日に沿線の勝山市で開催される、奥越の奇祭「左義長まつり」をPRするヘッドマークが一部の列車に装備された。

福井支部 ホームページアドレス

URL http://www.geocities.jp/railfan_fukui/

京福 勝山-大野間 33年後の痕跡を探る (3) 渡邊 誠

【6】赤根川橋梁付近

下荒井トンネルを抜けるとすぐ九頭竜川の支流赤根側を渡る(写真-12)。現在の道路橋とは交差する位置に鉄橋が架かっていた。道路橋から川面をのぞくと、ちょうどトンネルからの延長線上に橋脚の基礎らしきものが残っている。✓



写真-12 赤根川橋梁跡付近

トンネル方向へ視線を戻すと、馬蹄形のトンネル上辺あたりから向かって右(東)方向に、大正3(1914)年の創業時から10年間だけ使われた旧線跡が確認できる。創業時はずいぶん高いところを通ったものと感心する。

橋を戻って旧線跡へ上ってみることにした。『わだち』104号でもレポートしたとおり、80年余の星霜を経ているため荒廃が激しいが、山腹のこの平らな地形はたしかに人の手によるもの

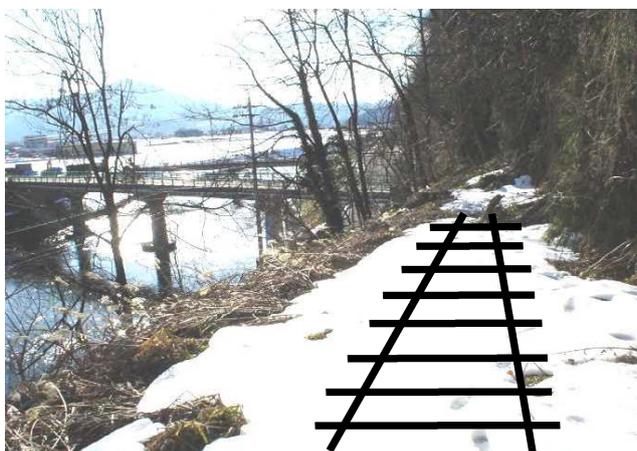


写真-13 大正13年までの旧線跡

である(写真-13)。眼前に大野盆地が広がるが、この高さから降りるにはかなりの急勾配になる。『越前線写真帖』には、

「旧・下荒井隧道を抜けると急坂を転がるように走りながら赤根川鉄橋を渡り、大野へと向かった。(P.42)」

とある。悪天候時は乗務員乗客ともにさぞかし神経を使ったことであろう。

ここはもう大野市である。急曲線急勾配の連続であった勝山市内とうってかわり、ここから大野市街地にいたるまでおよそ3キロに渡って、ほぼ直線上に線路は延びていた。国道157号線に並行し、越美北線との交差個所までの線路跡は歩道・自転車道に姿を変えている(写真-14)。



写真-14 赤根川橋梁跡から新在家方向を見る

【7】新在家駅付近

新在家は定期列車の交換駅であり、島式ホームと独立駅舎があった。周囲の田んぼは耕地整理されているように見えるが、なぜか駅の跡だけ更地のまま残っている。跡地は台形状にふくらみ島式ホームがあったことがよく分かる。手前(大野方向)のほうが駅舎の跡になる(写真-15)。廃線跡探訪のためにはありがたいことだが、更地のまま手を付けないのはもったいないようにも思う。地権者同士で話し合いが着かないのであろうか。



写真-15 新在家駅跡

新在家、中津川両駅のあたりは若干の集落があったものの、当時はほとんど一面田んぼであった。廃線後は車社会への移行を象徴するかのようになり、運転免許センターに量販店、パチンコ店、農機具や建設機械関係の会社などがいくつも進出し、景観は大きく様変わりしている

【8】清滝川橋梁

昭和40(1965)年9月、岐阜県境付近を集中豪雨が襲い当時の大野郡西谷村が全村壊滅状態となった。このとき線路も大野勝山両市内の各所で冠水したが、最大の被害は新在家-中津川間に架かる清滝川橋梁の流出であった。並行する道路橋は無事であったので、橋の前後に木造の仮設ホームが造られ、この間は徒歩連絡となった。

幸いにもこれを機会に一気に廃線へと進むことはなく、ほどなく代わりの橋が架けられた。



写真-16 清滝川橋梁

【9】中津川駅付近

中津川は片面ホームの無人駅であった。ここも新在家と同様にホームの跡が更地となっており残っている。ホーム上にあった駅舎は解体され、廃材はバス停に姿を変えたという(写真-16)。この駅の裏に変電所があり、建物は近年まで残っていたが、数年前に取り壊された。

中津川は昭和40(1965)年に開校した県立大野工業高校(現大野東高校)の最寄り駅であり、私を含む勝山方面からの生徒はもとより、福井方面からの教職員も多く乗っていて、下りでも朝は2両連結車が満員であった。



写真-17 中津川駅跡



写真-18 標柱

冬場は三国港から乗ってくる“ぼてさん”(魚の行商人)の臭いに閉口したものだが、“セイコガニ”(ズワイガニの雌)を3時のおやつという、海の食文化を山奥にまで伝えてくれたことに感謝したい。

勝山大野間の廃線は、モータリゼーションすることながら、昭和35(1960)年に開通した越美北線の影響が大きい。5年後の昭和40年7月、30分間隔であったダイヤが、日中は1時間間隔に改められた。平日はさほど影響を感じなかったが、土曜は小さな待合室だけのこの駅で1時間近く待たされるのが空腹にこたえたものである。今思えば、これが廃線への序奏でもあった。

以下次号